



ランケに関する研究 (小林秀雄)

一 ランケに至る史學の道程

科學的歴史の基礎は遠くフマニズムの往時に遡る。科學的歴史はフマニズムが齎した人類同様の觀念に基づくもので、この觀念なくしては科學的歴史は全然成立するを得ない。實にこの觀念はフマニズムが歴史に與へた偉大なる貢獻である。然しフマニストの尙古思想は少からず歴史記述の進歩を妨げたことをも考へねばならない。フマニストはローマ時代の史家を典型とし、切に之を模倣するに勉めた爲め、弟子は其師より大なるを得ずして、遙かに古典史家の記述に劣れる所を見る。この間に於て只モンテスキューの自然的觀察とワレンチウス・バラの批判的研究は多少注目を値する問題である。

而して十六世紀に至り、デカートが出て懷疑哲學を唱ひ、カリレオによりて自然科学的研究の起るや此等の影響は漸く史學に現れ、一方ライブニッツを先頭とせる自然科学的觀察が勃興し、他方マウリナー派の批判的研究が隆盛となり、史料は精査され、歴史の基石が据付けられたが、依然之を立派なる建築物たらしむべき大精神を欠いて居た。而してこの大精神を發見するに至つたのは啓蒙思想である。啓蒙なる詞の特有の意義は傳統的神學的觀察に代ふるに、新なる自然科学的文化を基礎として、一切の建設を試みることで、啓蒙主義の史學は歴史を神學的學說より離して之を哲學的に觀察し、偶然的のものを一般的のものより區別せんとした所に價值を有するものである。猶彼等は從來の史家と異り、單に人類の一面のみを考察する舊套を脱して人的群衆生活の總ての範圍を通觀し、之が批判と解剖とに力を用ふると共に、又歴史を國家より解攻して、一般市民の現在に於ける政治問題を明白ならしむる計畫を立て、政治的歴史記述の一新生面を開拓して居り、之が後世史家に及ぼした影響は決して鮮少でない。

實にボルテアの如き、ヘルデルの如き、驕氣ながら國民精神、時代精神の聲を揚げ、人生の各種の現象、政治、宗教、財政、藝術等の體系的關係が説明され、又該博なる智識によつて史料の批判は完成された、然し啓蒙史家に特有なる世界的思想は人と人との區別をなさず、時代と場處とに基づく個性の相違を看過したるが爲に、其考察が完全に事實の眞想に到達する能はず、又彼等は堅く純理に

缺點を免るゝを得なかつた。然るに今歴史をしてかゝる弊害より脱せしめたものはフランス革命である。實にこの革命及び其直接の結果は歴史の價值及び問題に對する見解を根本的に變化せしめたのである。フランス革命は何を歴史に教へたか。此革命は勿論ある政治原理を根柢とせる包括的な革命手段によつて、長い時代の間で成立した一切の組織を破壊して、之に代ふるに新しいものを以てしたものである。然しこの革命の結果はフランスに於ては成功と見らるゝべきも、他國に於ては全然反對の状態を齎らし、著しい反動の傾向を作つた。他國に於ては、革命の黨人により作られた政治組織は殆んど破壊され、啓蒙主義の理論家が非理性的として罵つた歴史の勢力、傳統的權威を基礎として構成した建物は彼等が理性的として誇つたものより遙かに堅牢であると考へらるゝに至つた。かゝる變化を経験した諸國が、今歴史に對し、全然新しい評價をなすのは當然である。革命的國家の基礎が脆くも破壊したことよりして、一般世人は生命ある政治組織は全く理論的空想、又は自覺的目的により構成され得るものに非ずして、寧ろ無自覺な歴史發展の中に成立するものが最も確實であるといふ學說を考ふるに至つた。彼等は歴史中には人間の聰明より遙かに優れる神秘的智能の存在を考へ、かくして彼等は啓蒙史家の主張した如くに、個人が事件に干與する如きは非常な謬見で、個人は須らく歴史的

となれる關係の中に忍耐すべきであるとの結論に到達した。かくしてローマンチック史家の傾向は啓蒙史家の主張した如き、現代政治家は須らく現在事件と類似せる一般歴史先例に教訓を求むべしとの世界的思想を排して、政治家は宜しく其國の歴史よりして、自己行動の極限を學ぶべく、之によつて彼は神の欲し賜ふ歴史的秩序を破毀することなくして那邊に至り得さかを知り、又其國の傳説によつて自己の過失を何れの點まで改善し得べきかの暗示を受くべきであるといふに至り、この當然の結果としてローマンチック史家は國民史のみが研究を値する對象であると主張するに至つた。

ローマンチック史家は非常に民族的で、民族精神を以て民族團體の歴史發展に勢力を及ぼすものと考えたが、彼等の啓蒙主義に對する反抗は彼等をして啓蒙主義の取つたリアリスチックの道を歩むことを避けて、最も啓蒙主義者の排斥した幻想たり、迷信たる精神勢力に向ふた。彼等はいかに民族精神は其生命を保有する限り、組織、法律、文學、技術を喚起するものであり、自己の力によつて或物を作ることは非生産的なりと觀し、従つて民族の宗教、法律、技術等を取扱ふに當り、必らず之を生ぜしめた一般狀態を顧みるに至り、自然史學をして眼界を全體に向けしめ、かくて從來外的に並立せしものが内的に結合さるゝを見る。

而して殊にドイツでは維新時代に於て言語と文化とは唯一の結合物であつたので、言語は或團體間に於て獨立の發展をなすといふ新しい見解が歴史に擴張され、之によつて歴史の謎が解決さると考へ

二 史家としてのランケの輪廓

ランケの存在は紀元一七九五——一八八六年の間で、彼が此世に現れたのは、恰もナポレオンがアウエルシュタットに大勝を得た時で、彼が此世を去つたのは正にビスマルクがクルツールカムプに終を置くことに決心した時である。此間彼は實にナポレオンのプロシヤ占領から自由戰役後のプロシヤの勃興及び新ドイツ帝國の建設を目撃し、またローマンチック運動の興起、古典的思想の復興及び現實主義隆盛の時代を経験した。

ランケは初よりして史家たらしめたのではなく、神學者として身を立てんと企てたのであつて、それが史家たるに至つたのは全く偶然であつた。彼は神學を研究してゐる間に自然史學の興味に引きずられて行つたのであつて、必ずしも思慮ある決意によつて之に轉換したのではない。いふまでもなく當時神學の研究者にとつて言語學は最重要な科目であつたが、彼が新舊約聖書の研究の爲に、古典文學や、ローマゲルマン文學の講究を進めて行くと共に、恰もフマニストの人々が経験したと同じ経験を爲さねばならなかつた。即ち民族の文學の中に其民族の生活の姿をみつゝるに至り、またこの姿

が次第に著しくなるに従つて、之に明瞭な形を與ふべき必要を痛切に感じ出し、かくて自然自己の領域より脱して史家となるに至つたのである。而してこの試に際して彼が本來もつて居つた天才がこの方面の研究に非常に効果を來らしめたものといひ得べきである。

ランケは神學者として言語研究の上より同時代の言語學者等とは密接な關係を有するに至り、また深く此等の學者の作物と親んだことは當然で、當時言語學的批判史家たるニーブールを初め、ウォルフや、ベツク等の著書は最も愛讀したもので、殊に彼のニーブールの言語的批判の方法を採用してゐる點が如くであり、實際彼の作物を一讀せば、彼がニーブールの言語的批判の方法を採用してゐる點については、何人も首肯し得る所である。然し彼は單なるニーブールの奴隸ではなく、彼の方法はやゝ、ニーブールより進んで居り、更に科學的な歴史的方法を取り、またローマンチックの空想的な、獨斷的な組織をさけて、現在の經驗的觀察と一致せるものを採用して居る。

ランケは神學者として思想の上ではカントや、フイヒテに負ふ所が少くないと思はれる。彼自身も之を自白してゐる。此等の哲學者の作物は彼の好んで讀んだもので、彼が此等の哲學者の影響を受けたことに確實である。然し彼の史觀は此等の哲學的史家と大に趣を異にし、カントや、フイヒテの直系と見るべきヘーゲルとは全く方向を別にしてゐる。彼はヘーゲルの如くに歴史を支配せんとせず、寧ろ之を理解するに努め、またヘーゲルの如きロマンチック特有の獨斷的價值判定を排して堅く時代

その大體、ランケの思想は、實際と何等の關係も無い、彼は、實際の、
イ説は、フシホルトのそれに類似する所なきに非ざるも、是は全く理論的のもので、彼は、實際的の
ものである。ランケのイデイ説は彼の時代の反映であり、明かに現在の觀察より出發したもので、彼
は時代の自由主義と保守主義、また專政主義と立憲主義の争を経験して、こゝに彼の史觀の根據を置
いたのである。彼の歴史の主題であるローマ、ゲルマン的民族統一の觀念も維新時代の政治的經驗か
ら抽出されたもので、こゝから彼の歴史に關する推論が得られたものである。實にランケのイデイ説
は當代に行はれた他のイデイ史家のそれとは大にその性質を異にしてゐるものと思はれる。

然しランケは歴史に於けるイデイの意義の解釋についてはオリデナリチーを示してゐるとはいへない。彼が時代の史家に超越する所はイデイ史家のプログラムをばフランス革命の經驗によつて歴史上に有力に完成した點にある。彼は他のイデイ史家よりも強く歴史上有力なイデイは超自然的勢力でなくして人間の永在的形體、具體的要求に存するといふ思想を確定し、他のものよりも一層堅實にイデイの批判を示した。史家は重要な傾向及び其他の生命ある勢力を記述するにあつて、批判すべきものでないといふのが彼の確信であつた。然し彼は尙他のイデイ説を唱ふる人と同じく、物質的利害をば假定的なイデイの助によつて精神化せんとする傾向を分つて居り、彼等と同じくこのイデイの根本を研究し

て居らず、やゝ漠然たる神の攝理なるものを示すに止めてゐる。彼が自叙傳にいふてゐる如く、こゝにも神學があるのである。不思議にもこゝに神學者の本領が残つてゐるのは遺憾の感に耐えない。イディ説を國際的權力關係の宣義の現案と告ぐと、

チック史家の如くに民族的働作を以て人類に幸福を與ふる唯一のものとしてゐる獨斷的な信仰を排斥してゐる。彼は民族性の必要を認めなくてはなないが、常に之をヨーロッパ的論點に服屬せしめて居り、運動の根源が外國に存する故を以て、之を滅亡的と見なすが如き人爲的、民族的孤立の立場に立つを欲しなかつた。從來國家の内的歴史を觀察するに當つて、常に離れ離れな機械的發展が豫定されたのであるが、ランケは國際的權力關係がたえず歐洲の諸國家の内政に干渉し、變化せしむることを主張した。彼は實にこの時代に於て國家相互間の權力關係についての意義を最も明瞭に理解した史家である。從來フランス革命は全然フランスの關係から考へられたに反して、彼は之を十七紀以來北歐と東歐との國家關係がフランスに及ぼした影響を以て現してゐる。

彼のイディ説にせよ、民族説にせよ、從來の歴史認識に、また之によつて構成された歴史理論に對して、歴史的經驗主義を有力ならしめた。彼はローマンチック史家の總ての神秘的發展形式——歴史が特有の法則に従はず、常に種々なる國家間の偶然なる權力關係にある——民族生活の本質を明かにし、偶然の觀念に明瞭なる解釋を與へてゐる。

したものではない。昔時この點に注意し、生きた肖像を示してゐるのは、モテの作者の、フランクも多少これを研究したが啓蒙派の勃興以來個性は事件其物の如く重視されなくなり、而してロマンチック派は極めて外的な心理を理解したに過ぎなかつた。ランケは飽くまで歴史人物の精神生活を説明せねば満足が出来ず、かくて彼の詞をかるれば他人の思想に侵入する不思議な力を有つて居つた。彼は單なる目論見をば超定計畫の如くに追求してゐる所に特色を示してゐる。然も尙ランケの心理部に制限がある。作家が自己に近い性質に對しては十分満足な結果を示すもので、彼には教育ある宗教的人物の解剖が最も適當してゐる。彼は十分に人間の理解に努力してゐるが、只其の半を實現し得た。彼の記述には根本的の道はないにせよ、更に有力な補充を要する。殊に其心理解剖は單に個人的であつて十分社會心理に及んで居らない。之は後日に俟たねばならなかつた。

ランケは明白に啓蒙及びローマン主義の傾向より離るゝことを試みたもので、彼は歴史を本來あつた如くに——*wie es eigentlich gewesen*——知られんと欲したことは疑はれない。然し彼は餘りに歴史を精神化して人間の動物性を忘却し、また歴史哲學の空論より脱せんとして多く根本的歴史問題を輕視した點を見る。とまれ何人も彼ほどに歴史記述家として理想に近いものを見ない。彼が政治的思想

家として、學者的研究家として、又歴史哲學者として、斬然頭角を他の史家の上に現してゐることは異論のない所である。

英のバーナは其「史家の歴史」の中にランケの史學上に於ける功績を左の三項に分つて述べてゐる。

1. The first was to divorce the study of the past from the passions of the present, and to relate what actually occurred—wie es eigentlich gewesen.
2. The second service was to establish the necessity of founding historical construction on strictly contemporary sources.
3. Thirdly, he founded the science of evidence by the analysis of authorities, contemporary or otherwise, in the light of the author's temperament, affiliations and opportunity of knowledge and by comparison with the testimony of other writers.

平凡な詞ではあるが、要を得て居ると思ふ